UNIVERSITY OF YAMANASHI
はなみずき
（病院だより）
第56号
2011年9月1日
発　行
山梨大学
医学部附属病院

山梨大学医学部附属病院南三陸町医療救護班派遣を振り返って

病院長　島田　眞路

山梨大学医学部附属病院は、山梨県からの要請に基づき、このたびの大震災で津波による甚大な被害を被ったエリアである宮城県南三陸町に医療救護班を派遣しました。

派遣期間は3月18日から5月13日までおよそ2ヶ月にわたり、その間22チーム・のべ124名の職員が被災地に入り、医療救護活動に従事しました。

派遣チーム編成にあたって、もっとも苦慮したのは現地のニーズに派遣職員をいかにマッチさせるかでした。まず1、2班は救急医療への対応を考慮して救急部、集中治療部を中心に編成、続く第3、4班では急性疾患から慢性疾患への移行、避難所生活の影響等を考慮して整形外科医を派遣、第5班では小児科のニーズを考慮して小児科医を派遣・・といったような大きな方針を立てた上で、各班からもたらされる現地情報を考慮しつつ、後続する各班の編成に取り組みました。

この際、大きな効果があったのが、学内情報交換会でした。

これは3日ごとの医療救護班の出発にあわせ、派遣中の班を間に挟み、帰学した班と出発を控える班とが顔を合わせるもので、以後順次実施され、刻々と変動する現地情報の的確な把握と対応策の立案・実施へとつながり、各班の円滑な現地活動に非常に有効に働きました。特に医療ニーズに関する情報は、後続する班のメンバー構成の検討に役立ちました。

このように派遣本部(附属病院)と派遣される各班とが綿密に情報共有することにより、様々な事象に対して的確な対応を講じることが可能となりました。このたびの一連の派遣活動が有機的かつ円滑に実施できた大きな要因と考えます。

被災地における医療救護活動は、現地の状況変動とともに刻々と変化しました。

派遣初期の第1～3班は、被災者の救援、救急医療に続く初期医療の立ち上げに携わり、エリア内の避難所、孤立した集落を巡回しての診療に従事し、救護医療の空白を埋めていきました。

第4班から、本学医療救護班の拠点が歌津地区の歌津中学校避難所に固定されました。この時期には、地域を巡回する訪問診療が一段落し、避難所における拠点診療中心に移行するとともに、専門分野に特化した医療の需要が高まっていました。疾患においては、急性期から慢性期へと移行したことに伴い、慢性疾患への対応及び避難所での生活に起因する心身不調へのケア・体調管理に重点がシフトしました。避難所生活で懸念される感染症対策として、公衆衛生・保健活動も医療救護活動の重要な要素となりました。

女性の患者さんを掘り起こすための女医の派遣、公衆衛生への取り組み・感染症予防対策のフォローアップを担う看護師の派遣、ICD(感染症対策専門医)資格を持つ医師の派遣、長引く避難所生活を考慮しての理学療法士の派遣、栄養管理の重要性を考慮した調理師の派遣等々、すべての試みが功を奏したわけではありませんが、派遣と同時並行して被災地のニーズを探る努力が続けられました。

被災者支援に大きく貢献したのは、医師、看護師ばかりではありません。

第1班には薬剤師が含まれておりましたが、そこからの現地情報として、深刻な薬剤不足、さらに薬剤整理が全くなされていないとの報告がありました。このことは第2班以降に伝達され、継続派遣された本学薬剤師のもと、不足薬剤を補充し、整理棚などを持ち込み、医療統括本部の薬局の立ち上げ・機能強化に尽力しました。

また同じく第1班からPCを含めた事務機能構築の必要性が伝達され、第2班の派遣に際しては早速PC、プリンターを用意しました。第2班より事務職員がメンバーに加わり、彼らは志津川ベイサイドアリーナ医療統括本部にて、持ち込んだ事務機器をフル活用して情報管理機能立ち上げに取り組みました。

このことは、これまで紙媒体でやりとりされていたため集約・管理できていなかった南三陸町47ヶ所の各避難所における避難者収容情報、医師派遣情報、医療活動状況等の重要情報を医療救護関係者が共有するための重大な任務でした。

次頁へつづく

南三陸町医療統括責任者の西澤匡史医師（右）と会談する島田病院長

効果的な医療救護活動を行うに欠かせないこれら重要情報の管理・共有が大きく遅れていたことは被災地における情報が錯綜する主因となっていたところであり、この問題解決に成功したことが医療統括責任者である西澤匡史医師に高く評価され、以降本学事務職員が医療統括本部における情報管理機能の維持・強化にあたるスタイルが確立し、後続する派遣チームに引き継がれました。

4月中旬、医療総括本部より災害医療から脱却し地域医療の自立・再生を目指す今後の南三陸町の医療の在り方が示されました。その方針は、イスラエル医師団が残した医療施設をベースとする公立志津川病院を設置・保険診療を開始し、それに伴い支援チームによる避難所診療を縮小（志津川病院仮設診療所と歌津中学校避難所を含む6ヶ所の避難所のみ）すること、5月13日をもって全ての避難所診療を終了し、以降は志津川病院仮設診療所及び鎌田医院仮設診療所で地域診療にあたることを旨とするものでした。

本学医療救護班は地元からの強い要請を受け、引き続き歌津中学校避難所にて医療救護活動にあたることとなり、撤収の日を見据えながら最後の最後まで歌津にとどまりました。

こうして、あの甚大な津波の被害からわずか2ヶ月後、南三陸町は公立志津川病院仮設診療所を核とする新たな診療体制をスタートさせました。このことは同様に被災した他の地域の状況を考えれば奇跡的と言えます。これには、イスラエル医師団が残した医療施設等の存在が大きく寄与したとともに、私たちの医療救護活動も、ささやかながらその一翼を担ったものと自負しております。

南三陸町における医療救護活動が成功裡に完結したことは、派遣メンバーとともに大学・病院にあって後方支援にあたった職員も含め、本院の目標である“病院全体がひとつのチーム”として機能した賜物でありました。このことは、改めて皆様に感謝申し上げたいと思います。

最後に被災地の皆様に一日も早い復旧、復興の日が訪れますことをお祈りし、結びといたします。

臨床教育センター設立にあたって

臨床教育センター長　板倉　淳

＜センターの取り組み＞

近年の研修医減少を受けて設立された本センターは、研修内容の改善と研修環境の整備に取り組んでいます。

研修内容の改善としては、研修医から強い要望が寄せられた1次2次救急の研修を充実させるため、新たに地域2次救急輪番制に参加しています。これは、予想以上に有益な研修の場として2年目研修医も自主的に参加しています。24年度からは大学病院連携事業の提携校である、聖マリアンナ医科大学系列病院や北里大学での研修も可能となります。

研修環境の整備としては、従来の研修医室を改修し、個別の机を備えた自習室と、男女別でシャワールームを完備した休憩室の設置を進めています。またここ数年間力を注いで集積してきた様々なシミュレーション機器を一括管理し、学生、研修医、医師、看護師がいつでも実技トレーニングが行えるシミュレーションセンターの設置も進めています。

＜センターの目指すもの＞

本センターの役割は、卒前教育から生涯学習までの時間的な縦軸と、地域の医療施設を対象とした空間的な横軸を念頭にした医師教育であると考えています。専門診療科の集合体として閉鎖的であった環境を開放し、地域医療にとっての知識・技術・人的ソースとして機能していくことが求められていると考えます。全国的にも医師不足が著しい山梨県においては、県行政や県立中央病院等の基幹病院との連携が重要であり、その中核として主導的役割を担えるよう整備を進めていきたいと考えています。

個別に机と本棚を備えた自習室

アメニティを充実させた研修医用休憩室

ＮＩＣＵ・ＧＣＵがオープンしました

ＮＩＣＵ師長　杉田　節子

本年4月1日にNICU（6床）・GCU（12床）がオープンしました。

従来からの循環器疾患に加え、未熟児など周産期にかかわる疾患の受入れを行なっております。他院への新生児搬送が回避できたことは大きなメリットと考えます。チーム医療が円滑に行えるよう、NICUでは毎朝、医師・看護師・GCU師長・医療福祉支援センターが参加し、治療・看護方針・ベットコントロール等について情報共有を行うとともに、毎月、医師・看護師合同での全体会議で協議し、問題解決にあたっています。産科・NICU間では情報交換を毎週行いながら連携を図り、GCU・3階東病棟と調整しながら24時間の受入れ体制を整えています。

また、県内の新生児事例検討を行なう周産期懇話会参加や新生児蘇生法講習会参加など各自がスキルアップに努力しています。

始動して5カ月、課題ばかりですが、医師、看護師、他職種と連携しながら一歩づつ進めていきたいと思っております。

改修工事中はご協力ありがとうございました。紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

夜間２次救急診療の開始について

救急部長　松田　兼一

本年5月10日より、火曜日のみではありますが研修医教育のための夜間2次救急診療を開始することができました。皆様のご理解とご協力で大きなトラブルも無く順調に運営されています。夜間2次救急診療には、医師4名（救急部柳沢医師・皮膚科大沼医師を中心に、救急部医師1名、耳鼻科後期研修医1名）、夜勤師長1名（堀口師長又は平野師長）、看護師4名（ICU看護師2名、外来看護師2名）、学生サポーター4名（登録学生15名）でチームを組んで、診療と教育に励んでいます。

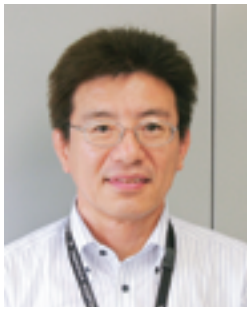
2次救急診療は過去12回（8月1日現在）行われました。一晩の受診患者数は平均12.9人、入院患者数は平均4.8人でした。最も多い夜でも受診患者数は19人、入院患者数は7人で、今のところ大きな混乱はありません。各病棟のご協力の下、毎晩約10名の入院ベットを確保頂いております。

研修医教育の成果ですが、他科当直医の多大なご協力もあり、大変良好です。その甲斐あって、救急部所属の1年目研修医のみならず、2年目研修医も特別参加してくれています。2年目研修医の救急研修をご許可下さった各科長先生にも大変感謝申し上げます。

入院ベット数や教育医確保に限りがありますので、当分の間は火曜日夜のみとなってしまいますが、今回の試みが、本院研修医確保、山梨県への医師定着、山梨県の救急医療充実に少しでもお役に立てればと考えております。チーム一丸となって頑張りますのでよろしくお願い申し上げます。

新任挨拶

病院経営企画室長　山田　芳男



このたび、7月1日付けで病院経営企画室長を拝命しました山田芳男です。私は、昭和57年に山梨医科大学に転任し、会計課、施設課、庶務課、統合後の経営企画課、財務管理課に在職しまして、主に会計関係の仕事をしてきました。前任者と同様に、よろしくお願いいたします。

昭和58年10月の附属病院開院の直前、完成間もない病院建物の換気のために、朝夕に窓の開閉当番を行ったのがつい先日のように思い出されますが、あれから28年が経過し、新しい診療機能が増設された結果、全ての機能において狭隘化が進み、本院の使命である「医療人の育成」「安全で適切な医療の提供」「高度医療の推進」のいずれの点からも、不十分なものといわざるを得ない状況になっています。

これらを解消して病院機能の再充実を図り、地域医療の中核的拠点機能を担う病院として、地域医療の再生を果たすための新たな病院への再整備計画を概算要求しているところであり、責務の重さに身の引き締まる思いです。

「一人ひとりが満足できる病院」になるために、病院長をはじめ先生方、コ・メディカル・スタッフ及び事務の皆様全員のご指導とご協力をいただきながら、私自身も満足できる仕事にしたいと思います。附属病院の開院を経験し、また再整備に立ち会えることを光栄に思い、もとより微力ではございますが、本院のさらなる発展のために一生懸命取り組みますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

トリアージ訓練について

防災・対策委員会委員長　松田　兼一

災害対策本部

本年7月9日に行いましたトリアージ訓練は、東日本大震災における本院停電時の対応の混乱を受けて、「その時、私は何をすべきか」をテーマに掲げ、本院が被災した状況を想定した訓練とし、総勢497名に参加頂きました。

本年の特徴は医学部と病院が一体となった訓練の実現でした。災害対策本部に属する医学部及び病院幹部の方々の多数のご参加に感謝申し上げます。現場スタッフのみならず、幹部の方々の高い危機管理意識を目の前にして、本学では何が起きても何とかなるのではないかと、実感致しました。

その一方で、トリアージゾーン、緑及び黄色ゾーンに多数の傷病者が滞ってしまい、災害診療が例年よりもうまく行っていないように見えました。本院が一部被災してしまった想定でしたので、それが原因で、これほどうまく行かないものかと愕然としておりました。後に判明したことですが、本年は学生が傷病者役として例年以上に繰り返し受診したこと(一人で5回の強者もいたそうです)、演技がうますぎて、緑ゾーンから黄色ゾーンに傷病者が多数移動したことがわかりました。またトリアージゾーンでは昨年患者数の3倍、緑ゾーンでは2倍、黄色ゾーンでは3倍、赤ゾーンでは2倍の傷病者が押し寄せていたこともわかりました。文字通り、想定外の傷病者の来院となったために、それぞれのゾーンで昨年よりも混乱があったと理解しました。

しかし、負荷が掛かり過ぎた甲斐あって、新たな改善点も多々見つかり、今後すべきことが見えてきました。防災・災害対策室員一同、この貴重な経験を生かし、新しいマニュアル作りに取り組んで参ります。

今回のトリアージ訓練に際し、想定外の尋常ではない負荷に対して、必死に努力して頂いた皆様に心から感謝申し上げます。ご協力ありがとうございました。

トリアージゾーンの様子

緩和ケア研修会について

医療チームセンター長　飯嶋　哲也

去る6月4日（土）、5日（日）の2日間にわたり看護学科教育研究棟を会場に平成23年第2回山梨県緩和ケア研修会を開催いたしました。この研修会は日本緩和医療学会の「医師に対する緩和ケア教育プログラム」に準拠し、緩和ケアの基礎知識普及を目的とした研修会です。この研修会を年1回開催することが、がん診療連携拠点病院の認定要件になっています。また、がん性疼痛緩和指導管理料などの診療報酬算定には本研修会を修了していることが必要とされています。合計12時間余におよぶプログラム中に、講義だけでなく2回のロールプレイ、2回のグループワーク発表が含まれている参加型研修会であることが最も大きな特色です。今回の参加者は32名でした。参加医師27名のうち、本院医師は20名（うち初期研修医は11名）、他の県内医療施設の医師は7名でした。本来は医師向けの研修会ですが、本院の看護師5名にも参加していただき、より実践に即したグループワークを行いました。この研修を受けた医師の総数は全国で2万人を超えています。山梨県内ではこれまでに260名の医師が本研修を修了しております。本年度から山梨県内に緩和ケア認定看護師の養成コースが開設されました。来年度には山梨県に緩和ケア認定看護師が新たに20名誕生する予定です。医師向けの緩和ケア研修会として、今後もこの研修会の役割はますます重要性を増してくるものと考えられます。

1日目のグループワーク風景

それぞれの『 気づき 』を声に

安全管理室　GRM　古屋　塩美

東日本大震災の後、南三陸町への被災地支援や計画停電時の診療体制への取り組みの中で改めて感じたことは、本院の団結力の強さでした。これこそまさに今年度も安全の年間重点目標として挙げている「病院全体がひとつのチーム」そのものではないかと感じました。

病院というチームが目指すものは、より質の高い安全な医療を提供することであると考えています。そのためには、特定の誰かではなく、この病院というチームの中にいる誰もが「何かがおかしい」「このままでは危険ではないか」と感じたことを声に出し、そのことについて関わる部署が相互に知恵を出し合い対策を立て、その対策をみんなで実行していくことが大切です。

インシデントの分析をする中でコミュニケーションの不足が根本原因として挙げられています。日々の業務の中にあっても「何か気になる」「このままでは心配」と感じたことをそのままにせず、声に出すことで防げるインシデントがあります。「少し気になったけど大丈夫だと思った」ではなく「少し気になるから相談してみよう」と考えてみてください。言葉にすることで、他のメンバーからの情報が加わり、より適切な判断につながる可能性があります。

「人は誰でも間違える」と言われているのは「間違えるものだから仕方がない」ということではなく、「間違えない人はいない」からこそ、何か「おかしい」と感じたのであれば相手が誰であってもきちんと伝えることが必要なのです。

これからも病院がひとつになって、質の高い安全な医療を提供するために、皆さんの『気づき』を声に出していただけるようにお願いします。

院内の節電について

省エネ推進委員会委員　高山　俊雄

東日本大震災の発生による福島第一原子力発電所の稼動停止の影響で、東京電力管内の電力供給量が大幅に減少し大きな需給ギャップが生じたことで、1974年の第1次オイルショック以来37年ぶりに電気事業法27条による「電力使用制限令」が発動されました。37年前、筆者はまだ中学生であり、また今ほどエアコンの普及が進んでいなかったので、東京銀座のネオンが消えた！！というのが強く印象に残っている程度です。

今回の使用制限は大口需要家に対し最大使用電力の前年比一律15％削減の義務付けという過酷なものであり、省エネ推進委員会での議論も、果たして大学でこの削減が実施できるか、どのくらいの対策が必要か大いに悩んでいたところです。

幸いなこと（？）に病院など国民の生命･身体の安全確保に不可欠な需要設備に対しては制限緩和措置が認められ「削減率０％」となりました。しかし、節電努力はしなければならず、節減策の緩和申請を提出し、その実行が求められています。

本院で取り組んでいる節減策は、①照明:間引き点灯又は消灯、②空調:室温28℃の徹底、③機械室等の機器運転制限が主なもので、患者さんに影響のない範囲で実施することが前提で思い切った対策が取れないこともありますが、使用制限が始まる前から比べると院内の照明は随分暗くなりました。

7月、8月の気温の状況をみますと、一時的に例年に比べ涼しい時期もありましたが、今年も暑い夏になっています。平日の電力使用量は医学部キャンパス全体の使用電力上限値（3,172kw）の95％近くまで一時的に迫ったときもありましたが、おおむね90％弱（契約電力3,312kwに対しては約85％）で推移しています。これまでは順調ですが今後、残暑が厳しいなど天候次第でどのように電力使用が増減するかわかりません。「省エネパトロール」も実施されています。９月末、節電対策が終了した時に『対策以上によくやった！！』と言えるよう、職員一同頑張りましょう。

省エネパトロールにおいて、電気機器の使用状況をチェックする様子

一日看護師について

副看護部長　佐藤　あけみ

看護普及事業の一環として、看護に関心のある高等学校の生徒を対象に病院での看護業務の体験を通し、看護に対する正しい知識と理解を深めるとともに、看護を志す動機付けの一助とすることを目的として、6月13日に一日看護師が実施されました。今年度は、男子生徒を含む甲府昭和高校の1年生～3年生38名が、看護体験を行いました。白衣に着替え、各病棟にて看護師と一緒に看護を体験しました。

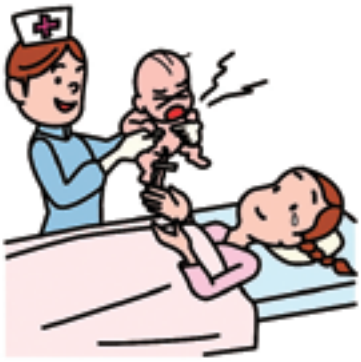
終了後の座談会では参加した学生さんから「大変な仕事ですが、とてもやりがいのある仕事だと思った」「看護師になりたいという思いがなお一層高まった」等の意見が出されました。受け入れた病棟からも「学生さんに看護を説明することによって、自身の学びにもなった」「看護師を志した時のことを思い出し、初心に帰ることが出来た」等の評価が得られました。

とても有意義な一日でした。何年後かに看護師として一緒に働けることを祈っております。

看護部長からの質問に答える
一日看護師の皆さん

甲府昭和高等学校２年　高原　里佳

私は産婦人科で看護体験をしました。妊婦さんのお腹にエコーを当て、赤ちゃんのあごや口、頭の形などを見て、お腹の中で生きている生命を実感しました。また、赤ちゃんをお風呂に入れている時の、しっかりと観察しながらも優しい看護師さんの眼差しや、なかなか体重が増えないという不安を抱えた赤ちゃんの体重測定で、体重の増加をお母さんと一緒に喜ぶ看護師さんの様子を見て、患者さんと良好な関係を築いている看護師さんや助産師さんに感動しました。実際に陣痛が起きた妊婦さんにも会いました。私自身もこちらの病院で産まれたので、自分の母もきっとこんな風に助産師さんに支えてもらいながら私を産んでくれたのだろうと思いました。



今回の体験を通して、生命の誕生に立ち会うことのできる「助産師」という仕事への興味・関心が強くなりました。そして、私も看護師の仲間になりたいと強く思いました。夢の実現に向けて一生懸命がんばります。

甲府昭和高等学校２年　乙黒　みづき

オリエンテーションで伺った、「一人ひとりが満足できる病院」という理念の通り、看護師さんたちは患者さんのことを第一に考えて、笑顔でいきいきと仕事をしていました。

今回は「脳外科」での体験でしたが、自由に動くことも言葉を発することも困難な患者さんの痰を吸引する様子を見ました。痰がたまったままだと感染症や肺炎になる恐れがあるので、しっかり取り除かなければならないことは説明されていましたが、それでも目に涙をため、苦しそうにうめき声を出す患者さんを見ていると、言葉が出ずにただ手を握ることしかできませんでした。しかし看護師さんは、「辛いね。もう少しだからね。」と、何とか不安や苦痛を和らげようと優しく声をかけていました。処置後の患者さんの気持ちよさそうな表情と看護師さんの嬉しそうな表情が忘れられません。そして看護師になりたいという思いを強くしました。看護師という夢に向かって、さらに努力していきます。

七夕コンサートについて

山梨大学医学部交響楽団

こんにちは、山梨大学医学部交響楽団です。私たちは医学科･看護科あわせて部員数約80名のオーケストラで、全国でも珍しい学生指揮のもと日々練習に励んでいます。主な発表の場としては秋の定期演奏会と春のスプリングコンサートがあり、この他にも幼稚園や老人ホームを訪問して演奏を行っています。

本院でも年に2回、七夕コンサートとクリスマスコンサートで演奏しています。例年のコンサートでは、木管･金管･弦がそれぞれアンサンブルを演奏した後に、全体でオーケストラとしての曲を1曲程度演奏していましたが、今回の七夕コンサートではよりオーケストラとして楽しめる曲をということで、『パイレーツ･オブ･カリビアン』と、カルメンより『闘牛士の歌』を全体で演奏しました。

医学部の学生であっても、実習が始まるまでは、患者さんと接する機会はなかなかありません。しかし実習中の先輩から、数週間前からコンサートを楽しみにしている方もいるという話を聞いたとき、改めて自分たちが演奏することの意義を感じ、とても嬉しく思いました。これからもコンサートを通じて、ひとときではありますが患者さんと音楽を共有できたらと思います。

医学部交響楽団の演奏の様子

演奏に聴き入る患者さん

夏祭りと納涼花火大会

小児科ボランティアサークル「サニースマイル」

夏祭りの様子

7月27日、順延となっていた夏祭りと納涼花火大会がようやく開催されました。当日も小雨が降ったので一時は開催が危ぶまれましたが、場所を病院の正面玄関に移し、無事開催することが出来ました。総務課からお借りしたはっぴを着て、僕達サニースマイルもお手伝いさせて頂きました。サニースマイルは本院の小児科病棟で活動している学生ボランティアサークルです。面会時間が終わる19時から就寝時間の21時まで、絵本を読んだりおもちゃで遊んだりと子供達と一緒に楽しい時間を過ごしています。

夏祭りでは輪投げ、的当て、ヨーヨー釣り、スーパーボールすくい、クジ引き等を行いました。入院している患者さんやそのご家族を始め、病院スタッフの方々等が多くいらしてとても賑やかでした。特にヨーヨー釣りやスーパーボールすくいは子供達に大人気で、自分の好きな色のスーパーボールやヨーヨーを取ろうとみんな頑張っていました。また、スターバックスがコーヒーやジュース等を提供して下さり、大変好評でした。そして夏祭りの後には病院の中庭で納涼花火大会が行われました。花火師さんを呼んでの本格的な花火で、打ち上げ花火やナイアガラ等、今年も綺麗な花火が夜空を彩りました。入院していて普段花火をあまり見ることがない子供達も目を輝かせて楽しんでいました。参加者全員の思い出に残る夏祭りになって本当に良かったです！

恒例のナイアガラ花火

富士山八合目救護所ボランティアに参加して

3階東病棟　窪田　智美

窪田看護師（左から2番目）とメンバーの皆さん

富士山ボランティアに参加したのは今回が初めてでした。メンバーは他病院の慣れた医師と初参加の3人。ドキドキしながら集合場所に行ったことを覚えています。

救護所での診察は、始めは戸惑いながらでしたが、皆で協力しながらだったのですぐに慣れることができました。登山者は土日だったこともあり国内外からのツアーも含めてとても多かったです。その中で救護所に来所する人は高山病の方が大半でしたが、中でも広島や長崎などの遠くから夜行バスに乗ってあまり眠れずに登山していた人が多かったと思います。

患者さんとの関わりでは、普段あまり遭遇することのない症状や疾患を持った人の処置の介助や、倒れたという人の電話越しでの問診等、色々な分野の記憶を掘り起こし対応しました。また、日本語のあまり話せない患者さんへ問診した時には英会話をもっと勉強しておけばよかったと思いました。短い期間でしたが、とても充実した時間を送ることができました。

一緒に行ったメンバーとは診察だけでなく、山小屋スタッフに交じりながらの食事や、協力して頂上まで登山したことで、いつの間にか家族みたいな関係になっていました。また、診察の合間に医師から地域の病院で働く楽しさや、山小屋の親父さんのスタッフ教育への思いを聞いたりと、病院で働いているだけでは関わることが出来ない方々と交流をもち、良い刺激をもえらえたと思います。本当にあっという間のボランティア期間でしたが、全てがとても良い思い出であり、良い経験になりました。

山梨大学再発見

国際流域環境研究センター

国際流域環境研究センター長　坂本　康

水は生物の細胞維持・更新になくてはならない物質です。水はまた、生態系、食料生産、地域環境などさまざまな社会条件を規定する基礎的要件でもあります。さらに、地球規模では極域～低緯度地域間の熱の差を緩和する役割もあります。このように、水の存在、役割が多様なだけに、水に関係する現象を明らかにするには多くの情報と技術が必要です。そこで、平成19年4月に創設された本センターでは、様々な条件を持つ地域や社会で、水をより健全かつ適切に管理することに役立つように、水に関する様々な研究を行っています。

カトマンズ盆地での地下水調査

具体的には、国内外における水資源の枯渇、水災害、水環境の悪化、水に起因する病気などの解決に必要な研究、それらを統合して個々の流域の暮らしに密着した水問題解決方法を提供するための研究を行っています。また、地球上を循環する水の管理には地球規模、地域規模の視点からの国際的理解と協力が不可欠なことから、水の専門家の国際的ネットワークの形成も行っています。

本センターの研究分野には、工学系の水工学、水環境工学、流域・地域計画に加え、医学系の流域疫学や健康リスク面に関する分野もあります。さまざまな学術を融合し、科学情報を基に地域の人々の安全を支えていきたいと考えています。また、研究活動とともに、国内外の水問題の解決に役立つ高度な専門知識を備えた人材の養成も行っていきます。

水や汚染物質の起源を探る安定同位体質量分析計

国際流域環境研究センターは、2008年から始まったグローバル COE プログラム「アジア域での流域総合水管理研究教育の展開」での活動の主体として、今後も、研究推進担当教員、国内外の多彩な研究員の国際的な連携により、先端的、独創的な研究を進めていきます。

甲府盆地内の気象を観測する高精度レーダー

PRINTED WITH SOY INK　VOC FREE
この印刷物は環境にやさしいVOC（揮発性有機化合物）成分フリーの大豆油を主体とした植物油型インキを使用して印刷しました。